

温泉

茶食住+温泉

「温泉」分科会

テーマ:「かかりつけ湯」で伊豆半島を癒しのメッカに

コーディネーター

日本大学短期大学部
商経学科教授

宮川 幸司



「かかりつけ湯」の必須条件は「良質な温泉」

静岡県東部地域の産業の活性化と市民の皆様の幸せのために「ファルマバレープロジェクト」というプロジェクトがあり、その一環として「かかりつけ湯」の取組があります。趣旨に賛同していただいたお宿さんに集まっていたいて、観光振興と健康をテーマにした活動をしている会です。

その「かかりつけ湯」の一番の元になっているのは、やはり良質な温泉です。それが加入の必須条件です。そして、それプラス「健(温泉を活用した健康プログラム)」、「食(健康に配慮した食事)」、「癒(さまざまな癒しの提供)」、「料(リーズナブルな料金)」の4つの条件を1つ以上持っているお宿さん、これに努力しているお宿さんの集まりです。伊豆を代表する大きなホテルから、こぢんまりとしているけれど地道にやっておられる小さな旅館まで、本当に色々なお宿さんが集まっており、それぞれ特徴を持っています。「かかりつけ湯」のホームページには、全部で52のお宿さんの温泉情報が詳しく掲載されています。

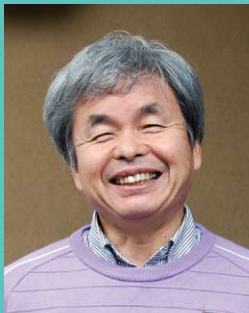


「温泉」分科会・会場

パネリスト

船原館代表
かかりつけ湯協議会代表幹事

鈴木 基文



鈴木基文[すずきもとふみ]
立教大学社会学部卒業後、1980年旅館「船原館」代表取締役に就任。2006年「かかりつけ湯協議会」代表幹事に就任。温泉地域学会会員であり、温泉マイスター、温泉入浴指導員、天城流湯治師、ワッツインストラクターの資格を持つ。

特色をもっと深めていく

船原館では東洋系の療法、温泉を使った水の療法をやっていますが、全ての療法が全ての人に同じように効くとは限りません。10人いれば10人同じように効果が出るわけではないのです。それをマイナス面にとらえられているんですが、決してそうではないんだと思っています。温泉も入り方があったり温度があったり、いろいろな面でその人に対する影響が違ってくる。画一的ではないのです。本来旅館ってそうでなければいけなかったのです。地域だと旅館だとかそういうものも持っている良さ、特色などを前に打ち出した施設作りです。だから「かかりつけ湯」として全く同じものを作るのではなく、様々な特色をもっと深めたものをウリにしていきたいと思います。

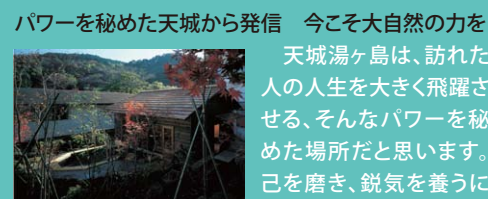
「かかりつけ湯」の条件として健康を切り口にした施設づくりや温泉づくりがありますが、実は「健康」では商売にならないという現実がまだあります。「健康」で明日のお客さんがすぐ来るかと言うと

そこまでいっていません。時間も掛かるし、やる側に腹をくくる覚悟があるのか、そういう気持ちが必要なんです。健康という切り口は妥協できないぞという意識を保つこと、そこが一番難しい問題です。



「温泉」分科会・会場

もうひとつ



船原館・たち湯外観

天城湯ヶ島は、訪れた人の人生を大きく飛躍させる、そんなパワーを秘めた場所だと思います。己を磨き、鋭気を養うにはうってつけの環境なのかもしれません。また、東日本大震災以降、エネルギー資源などの「継続(持続)可能な循環型社会」の重要性を見出した人も多いことでしょう。人間も資源と同じように、本来は循環・再生できなければならないのではないのでしょうか。昔ながらの素朴でシンプルな山の暮らし。ここに身を置き、大きな自然の一部として時を過ごす。人が心の底から癒しを感じる瞬間とは、こういうことではないでしょうか。

当館には、通常の3倍ほどの深さがある「たち湯」があり、そこでアメリカ生まれのアクアセラピー「ワッツ」や、杉本鍊堂氏考案の「天城流湯治法」などを行っています。このような、健康を切り口にした取組で、各地からインストラクターさんと生徒さんたちが来館しています。



船原館「天城流湯治法」

パネリスト

温泉紀行ライター

飯出 敏夫



飯出 敏夫[いいでとしお]
群馬県多野郡上野村出身。成城大学文学部卒業。日本全国の旅行書の取材・執筆・編集者として約20年。1995年に有限会社「温友社」を設立。2010年からはフリーで活躍。

「かかりつけ湯」が伊豆観光の突破口に

東日本大震災によって客足がぱたっと減ったのは伊豆だけではなく。伊豆は東京や横浜を近所にもつ非常に恵まれた土地ですので、温泉を訪れる人は震災前も減少していましたが、それほど深刻に客足の落ち込みを受け止めたことはなかったのではないかと思います。では、これからどうしていくのかを考えた時に、おそらくこの「かかりつけ湯」が伊豆観光の突破口になるのではと期待しています。

クオリティを求めないと破綻する

「かかりつけ湯」のメンバーは伊豆半島全域にわたっていますが、例えば宿に行っても「かかりつけ湯」だと一目で分かるように、のぼりや看板などで、「このお宿はメンバーなんだ。じゃあ安心して泊まれるね。」と言われるように認識してもらって取組をしないと宝の

持ち腐れになるのではと思います。

それから、4つの条件のどれか1つをクリアすれば会員になれるようですが、4つのうち3つぐらいクリアしないと甘過ぎると思います。会員を増やしていくのもいいのですが、質というか、クオリティを求めていかないといずれ破綻するのではないかと危惧もあります。そして、うちのお風呂はこういう利用をしていますとか、加水していますとか、そういう温泉の情報開示はきちんとしてもらう。それはとても大切なので、徹底して欲しいと思います。



栃木・那須湯本温泉「鹿の湯」にて

もうひとつ

訪れた湯は2500湯以上
「現場第一主義」を貫く温泉紀行ライター

全国に3170か所の温泉地と、27825か所の泉源があると言われる日本(日本温泉総合研究所)。そんな全国各地の温泉をめぐり、年間100日以上を温泉旅で過ごすという飯出さん。一般的な観光ガイドブック制作に約20年携わっていました。その後、初めて訪れる観光地が減少し感動が薄れてしまったことから、温泉紀行ライターの道を歩むことになったそう。そんな飯出さんのモットーは「現場第一主義」。読者に資する温泉情報を提供するため、徹底的に現場に足を運び、自分の目で確かめ、湯に浸かり生の声を伝えたいと話します。



栃木・加仁湯温泉にて



新潟・蓮華温泉にて

温泉選びには温泉そのもののほか、湯守の姿勢や生き様、宿や湯船の造り、料理やもてなしなどあらゆる角度から選定していくといいます。源泉掛け流しの湯はもちろんのこと、少ない湯量を懸命に守る小さな温泉場、山の中にひっそりと湧く野湯など、常に魅力ある温泉を情報発信しています。



著作物一例

パネリスト

駒の湯源泉荘代表
かかりつけ湯企画委員

高橋 誠



高橋 誠[たかはしまこと]
田方郡函南町在住。北里大学薬学部を卒業。北里研究所を経て、現・駒の湯源泉荘代表取締役に就任。薬剤師、鍼灸師の資格を持つほか、日本温泉気候物理医学会準会員、日本温泉地域学会会員、かかりつけ湯企画委員としても活動。静岡県主催・温泉マイスター専門講座終了。

「湯治」という古いイメージを変えていきたい

「かかりつけ湯」には、「健」「食」「癒」「料」の4つの条件があり、それを視野に入れて湯治を説明すると、散策や森林浴などで温泉地を楽しみながら体に優しい食事をもって良質な温泉の力を借りてリフレッシュする、これがこれからの湯治、「かかりつけ湯」の目指す湯治だろうと考えています。ゆっくり入浴して、体と心を休めるような湯治的な温泉需要というのは、私は絶対に高まっていくと思っています。湯治というものに対する古いイメージを少しでも変えていただければ幸いです。



「温泉」分科会・会場



湯の管理の様子

「かかりつけ湯」独自のアピールで、一般の人にも分かりやすく

パンフレットの中に「オススメ入浴法」というのがありますが、これを血圧の高い人用、腰痛の人用などいくつも種類を作っていくことも必要でしょう。それから浴室に必ずある温泉分析表を、専門家が温泉を分類するためのものではなく、もう少し噛み砕いて一般の方にわかるようなものに代え、「かかりつけ湯」として出していくなどです。独自性にも繋がりますし、「かかりつけ湯」のやっている仕事というのが、一般の方の目に止まるのではないかと思います。

もうひとつ

「湯守(ゆもり)」は「湯」の子守

自然林に囲まれた駒の湯源泉荘は、「ぬる湯の名湯」として「安心・安全な入浴」をコンセプトに、独自の路線を築いて参りました。自然の恵みで商売をしている私たちだからこそ、安心・安全な入浴方法の啓蒙活動は、義務であると考えています。温泉の効能や泉質を気にされる方も多いと思いますが、実は、本人が「気持ちいい」と感じる湯が、その人に合った温泉なのです。ですから温泉を治療目的など特別なものと捉えずに、日々の健康増進やリフレッシュ方法のひとつとして、気軽に温泉を活用していただきたいですね。

私は、生涯「湯守(ゆもり)」でありたいと思っています。「湯守」は、生き物である「湯」そのものの子守をすること。気候の変化に合わせて、感覚だけで湯の温度を微調整したり、バルブの調整や配管の修理などを担った重要な立場で、伊豆には2~3人しかいないといわれています。そんな昔ながらの湯守として、お客様と直接話し、信頼関係を築いていきたいと思っています。



駒の湯源泉荘「薬草風呂」の薬草